

かざ

ぐるま

# 風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

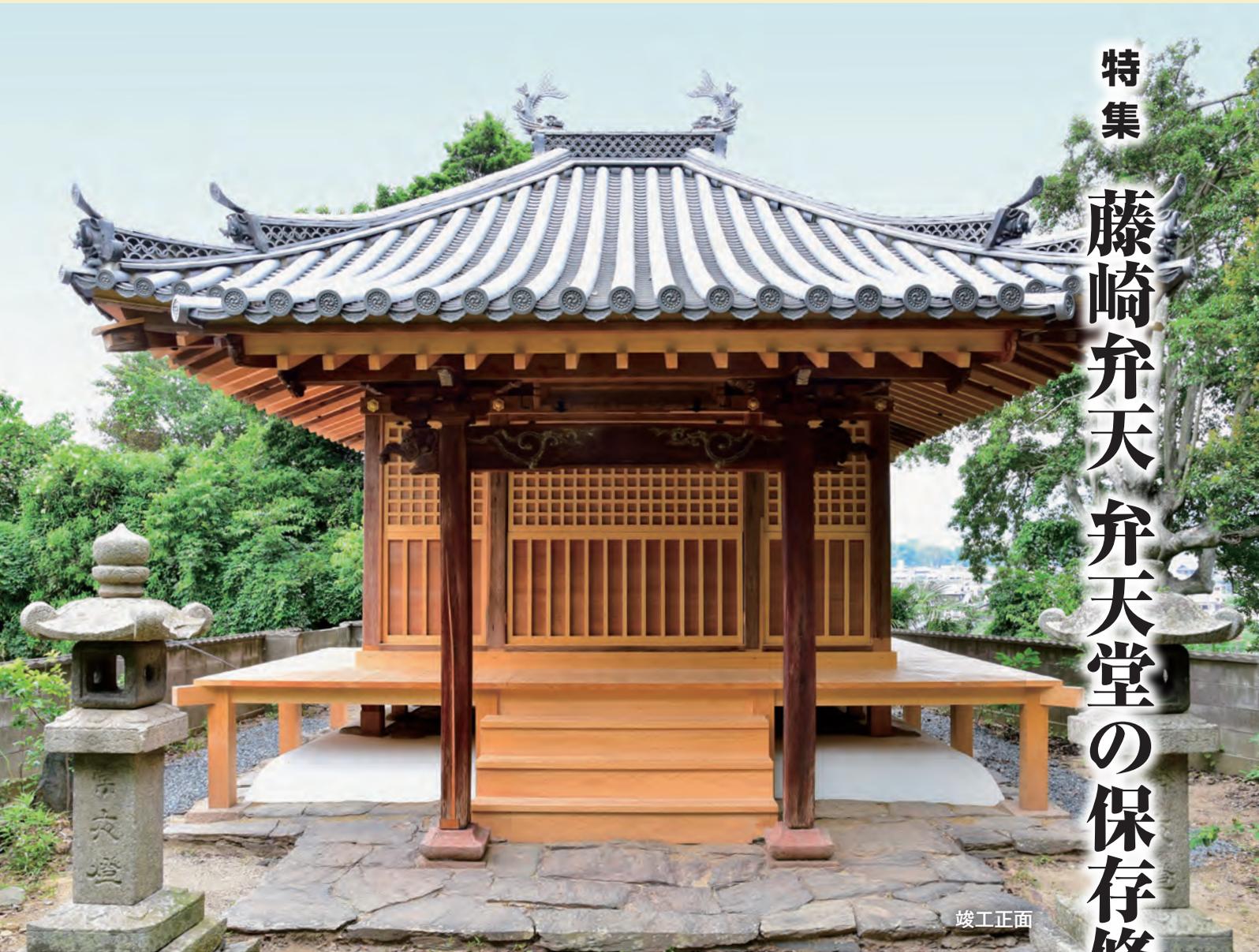
2022 夏号

# 99

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集

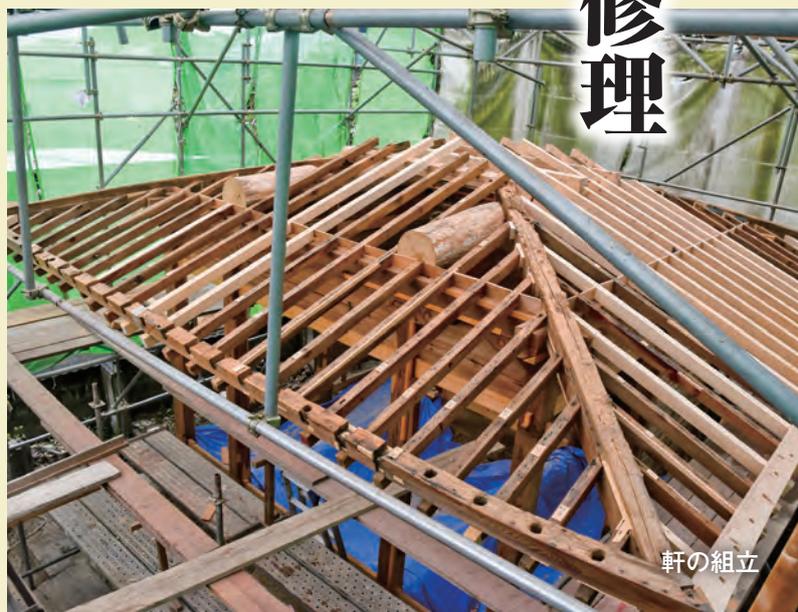
藤崎弁天堂の保存修理



竣工正面



軸部及び壁板の組立



軒の組立

# 特集 藤崎弁天 弁天堂の保存修理

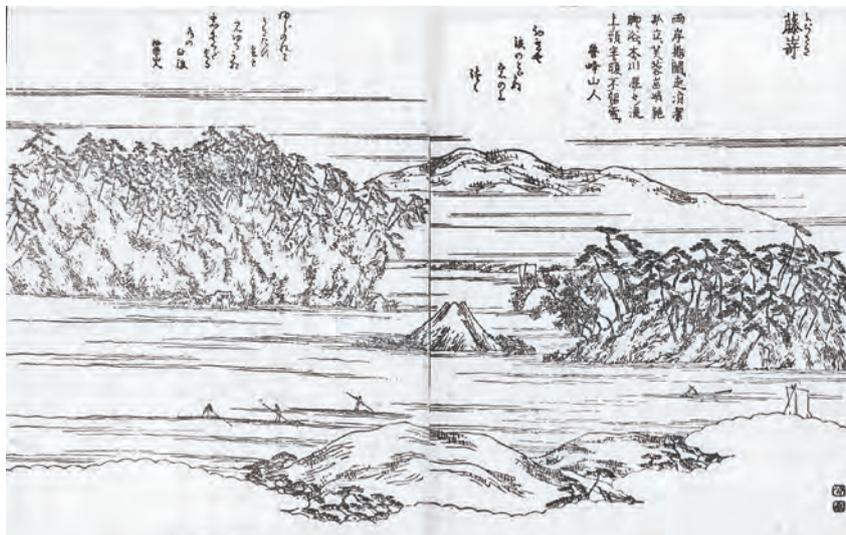
## 県指定名勝 藤崎弁天

紀の川の北岸、紀の川市藤崎に在する藤崎弁天は、紀伊国名所図絵などにも紀の川随一と記載される古くからの景勝地です。

川の中から富士山に見立てられる奇岩が立ち上がり、その岩を見下ろす丘の上に開かれた藤崎弁天は、堰による豊かな水量を誇る紀の川や龍門山を望む絶景の立地であり、幕末期にはこの風光を愛した琴の名手・古岳幽眞こがくゆうしんが古岳庵を構えたほか、明治期には陸奥宗光の所有となり、その後旧王子村（現紀の川市）に寄贈されるなどの歴史を経て、和歌山県の名勝に指定されています。

## 藤崎弁天堂

弁天堂は、正面三間、側面二間の正方形平面の小規模な仏堂で、正面に向拝こほひがつく寄棟の瓦屋根の建物です。内部は一室空間となっており、背面から半間の位置に建てられた来



紀伊国名所図絵 左の丘陵上に藤崎弁天が描かれている。

大きさなどから、江戸中期ごろの建物と推定され、向拝は江戸後期に増築されたと考えられています。

## 弁天堂の保存修理

弁天堂は、昭和五〇年ころには瓦屋根が葺き替えられ、縁や天井、床、側面建具が輸入木材やベニヤ板で張り替えられるなど、多くの改変が施されていました。さらに近年白蟻による被害が進み、木部や瓦屋根の破損が目立ってきたため、紀の川市の事業として令和元年度に保存修理を行うための実施設計を策定し、令和二から三年度の2か年で、半解体修理を実施しました。

弁天堂については、正確な図面などが作成されていなかったため、実施設計にあたり、建物を実測するとともに、すでに崩落してしまっていた屋根廻りの木部材も丁寧に調査し、必要な実測図を作成しました。

また、修理工事に伴い、部材の納まりや改変の様子を調査しながら建物を解体した結果、軸部や軒廻り、小屋組などに建立当初の状態が残されていること、向拝や脇仏壇が建立後に増築されたものであることなど、建物の変遷が明らかになってきました。

迎柱むかばしらの間に仏壇が設けられ、本尊である弁天像が祀られています。建物の建立時期などは不明でしたが、虹こりょう梁りょうにほどこされた渦彫刻の特徴や、柱の面

## 弁天堂の沿革

今回の事業に伴い、粉河寺文書『粉河寺旧記』に弁天堂の記載が確認されました。

『藤崎大弁財天之堂、二間四面、水無川之弁天を移。(中略)元禄年中、藤崎湯水通之守護神として彼堂を御国主分御建立』

藤崎では、紀州藩の命により大畑才蔵が開削した井堰いせきが元禄十四年に完成しており、弁天堂が井堰の守護として紀州藩によって建立されたことが明らかになりました。

また棟束に釘止めされた祈禱札きとうだも発見されました。建物の建立を示す文言や、施主、大工の名前などが記された建立棟札ではありませんが、『元禄拾四年』の年紀とともに、『国家安全』などの文字が記されており、古文書

の記載時期とも合致することから、藤崎弁天堂は、元禄十四年(1701)に棟上された建物であると判断できました。

また、崩落した部材の中から万延元年(1861)の年紀のある修理棟札も発見されました。『古岳庵』との記載もあることから、古岳幽真により藤崎弁天が整備された時期のものと分かります。修理に伴う調査により、この時期に向拝が増築され、外周が縦板壁で化粧直しされたことも判明しました。

また、西側に隣接して建設された古岳庵への渡り廊下が架けられ、西面の出入り口が整備されたほか、この時期に脇仏壇が増設されたことも明らかとなりました。

明治時代以降では、正面の棧唐戸が蝶番で吊り込まれており、マイナス溝のネジで留め



修理棟札  
万延元年  
(1861)



建立時祈禱札  
元禄十四年  
(1701)

られていることから、記録の残る大正十五年の改変と推定できました。

昭和五十年頃には棧瓦で屋根が葺き替えられており、縁廻りや向拝の軒が輸入木材で造り直され、天井板や床が合板に取り替えられています。またこの時期に内外装が弁柄やペンキで塗装され、亀腹は漆喰塗からコンクリート製に改変されていました。

## 弁天堂の修理方針と復原

三百二十年以上前に建てられた弁天堂は、修理を繰り返すことで現在まで守られてきました。しかし、合板や輸入木材が用いられるなど、歴史的建物としてはふさわしくない改造が行われていたことも事実です。このため、今回の修理事業にあたっては、名勝としての価値付けのひとつともなっている、古岳幽真が整備した幕末期の姿に復する形で修理を行う方針としました。

復原にあたっては、明確な根拠をもって行うことを堅持し、建物の痕跡の詳細な調査と並行して、紀の川市教育委員会の協力を得て古写真や古文書の調査も実施しました。

屋根に関しては、地元住民により、昭和三十八年に弁天堂を正面から撮影した古写真



昭和 38 年撮影の古写真 本瓦屋根の詳細や渡り廊下が確認できる。

が提供され、重要な資料となりました。修理前、椽瓦だった屋根は本瓦で葺かれ、軒平瓦に瓦頭の中央部下端が線形で造り出される滴水瓦が用いられるほか、棟には輪違いの装飾も施されています。これらは粉河寺境内の江戸時代の建物とも共通する特徴です。

棟に載せられる鯨や鬼瓦は、古材が境内に保管されており、破損した箇所を修理し、古材に做って新調することも出来ました。



鯨の復原新調作業の様子 左端が保存されていた古材

屋根の小屋組は、多くが蟻害により崩れてしまっていました。正面部分に残った当初の部材の納まりから屋根の勾配などを精査し、正確に復原することが出来ました。

軒廻りは、垂木に折損などもありましたが、身舎部分には原則当初の仕事が残されています。向拝が取り付く部分には、当初材の茅負を解体せずに加工し、木負として転用するなど、施工の状況が判明しました。勾配が改

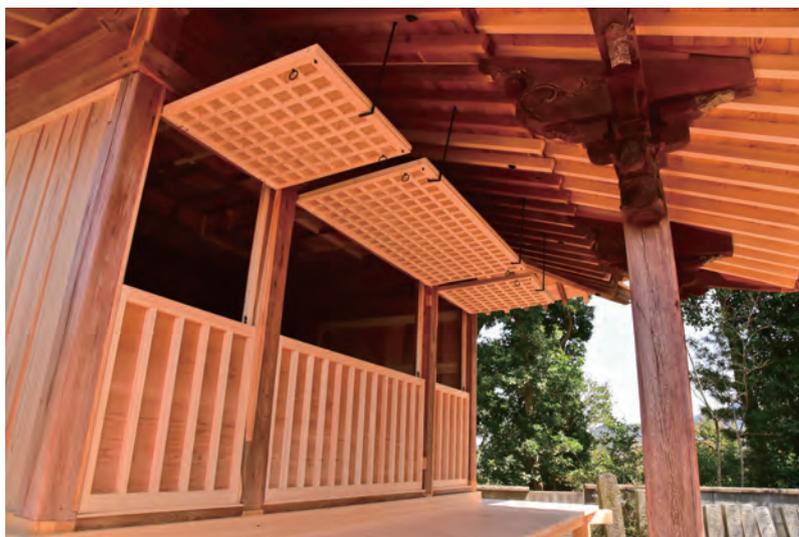
変されていた向拝部分については、手扶に残る勾配の痕跡から、身舎と同じとなる万延増築時の勾配に復しました。

建物の軸部は全て当初材が残っていましたが、側柱は足元が切断され、土台に載せられていました。唯一足元まで完存していた東側の来迎柱を基準に、建立時の柱長さを根継修理で復原し、組み立て直しました。

床組は昭和五〇年時にほとんどの部材が取り替えられていましたが、脇仏壇の下に当初の床板が残されており、壁と同仕様の楠の二尺巾の板材で復原新調しました。

柱間装置は、背面、側面後端間には建立当初からの楠の横嵌め板壁が残存し、その外周に目板付き縦板壁が張り重ねられていました。縦板壁には和釘が用いられたことが確認できたため、万延期に張られたものと判断し、今回の修理でも張り重ねました。

正面の建具は、無目鴨居に吊り金具が取り付けられていた痕跡、柱側面に36mm巾の辺付けが打ち付けられていた痕跡、垂木に開扉時の吊り金具を取り付けた痕跡が確認出来たため、半部であったことが判明しました。痕跡から建具の高さは特定できましたが、意匠の詳細は同時代の根来寺行者堂(十七世紀中期)を類例に、整備しました。



開扉時には水平に吊り上げられる半部



復原した天井と水にちなむ鯉の彫刻が嵌められた来迎柱廻り

側面前端間は、東面には二本溝の鴨居が残りますが、胴縁の仕口などから万延期に縦板壁に改変されたと判断しました。西面は敷居に間柱を取り付けた痕跡が確認出来、同間柱より南側に胴縁の取り付け痕跡も認められ、古写真に写る渡り廊下との納まりから、片引きの板戸に復しました。

天井は、屋根の崩壊とともに大破していましたが、当初の格縁ごうごちの部材が折損しているも

ののほぼ全材回収することが出来、中央部に折り上げが付く格天井ごうてんじょうであったことが確認できました。また天井板は昭和50年時の改修で

合板に張り替えられていましたが、堂内で発見した当初天井板の破片から、柱目まきめの杉板を継ぎ合わせた板の木目を45度傾けて張り込む、技巧を凝らした天井であったことが判明しました。同様の天井は、高野山の重要文化財金剛三昧院客殿(1624)にも用いられ、

簡素と捉えられていた弁天堂は、高い格式を持って建てられた建物であったことが理解できます。

縁廻りは、礎石から東の位置を復原し、木部は前述の行者堂を類例に整備しました。

また、木部に施されていた塗装に関しては、万延期と判断した縦板壁の転用材に塗装の痕跡が認められなかったことから、近年の改変による施工であることが判明したため、木材に影響が出ないよう慎重に掻き落とし、本来の白木の姿に復しました。

## おわりに

花見や夏祭りの舞台として地元住民に親しまれてきた藤崎弁天堂ですが、今回の修理を通して、紀州藩の一大土木事業の一環で建立された歴史を持つことが分かりました。

小さなお堂ですが、来迎柱に架けられた虹梁などの彫刻も精緻で、律動的な天井や水平に開く半部からは、藤崎井堰や弁天堂に馳せたと当時の人々の思いが伝わります。

藤崎井堰が国土交通省による改修が計画されている時期にあわせ復元的な修理が行えたことに、弁天堂が見守って来た歴史の重みを感じます。

(多井 忠嗣)



## 入郷遺跡の発掘調査成果

令和4年に伊都郡九度山町に所在する、入郷遺跡の発掘調査を町道156・176号線改良工事に先立って実施しました。

入郷遺跡は、紀の川の支流である丹生川西岸の台地の突端部に位置し、本調査地は遺跡の西端にあたります。以前の貯水場建設工事の際に発見され、縄文時代の石鏃やサヌカイト剥片が採取された散布地ですが、これまで縄文土器片などは見つかって



図1 入郷遺跡周辺遺跡地図

いません。

なお、本遺跡の北方、丹生川を挟んだ対岸には、真田昌幸・信繫親子の、近世の真田屋敷跡があり、西方の谷を挟んだ尾根の中腹には、中世の岡氏居城跡があります。

調査地の標高は120mほどで、現地表面から30〜70cmほど掘り下げると、掘立柱建物跡、柱穴跡、カマド跡、溝、土坑など、鎌倉時代から室町時代の遺構と遺物が見つかりました。

掘立柱建物跡は調査区の中央で見つかり、柱穴跡の直径は20〜40cmで、柱穴の埋土から青磁碗や土師器皿が出土しました。

### 調査区西

側の直径2mの土坑では、完形の土師器皿や瓦器碗、中国製青磁碗や白磁碗の破片、滑石製石鋼片や



写真1 調査区全景（東上空から）

砥石などの多く遺物が出土しました。

特に青磁碗は鎬蓮弁文碗と呼ばれる、蓮の花びらを器の表面に表



写真2 柱穴跡出土の灯明皿

したもので、中国で13世紀ごろにつくられたと考えられます。このような中国産青磁は当時の日本人にとっては高価で、なかなか手に入らないものでした。

今回の調査で中国製青磁碗や鉢の破片が多く出土したことから、鎌倉時代から室町時代ごろの本遺跡の調査地周辺は、一般的な集落ではなく、高野山や慈尊院との関りのある、比較的身分の高い人々が住んでいた可能性があり、貴重な調査成果となりました。

（田之上裕子）

紀の川市では、名手役所主屋の整備事業を進めています。現場は本部の組立が完了したところですが、この建物では現代住宅の鴨居よりも成せいの高い「差鴨居」という部材を用いています。これは両端を柱はしらに柄差し、柱と柱をつなぐ重要な部材です。一般的な民家の鴨居は部



差鴨居修理状況

屋境に、引戸を建て込む造作材です。差鴨居は、その役割に加えて、開口部の広い柱間を固める構造体としても役目を果たします。建物を支える部材をそのまま表わす意匠は、江戸時代における民家の特徴を示しています。



端部の仕口

名手役所主屋では一階の11箇所で差鴨居を使用します。ねじれが生じたものもありましたが、大工や建具工の熟練した技術で、10箇所当初材を再用し、本来の納まりに復することができました。樹種は折れにくく粘りのあるマツ材で、成が一尺(約30cm)、長さも4m以上ある立派な部材です。破損が大きく、やむなく取り替えることになった一本は、同じ寸法の木材を探すのに苦しんでいたただければ幸いです。

(大給 友樹)

## きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

入郷遺跡発掘調査において、鎌倉時代から室町時代の土坑から出土した、滑石製の羽釜型石鍋片をご紹介します。

滑石製石鍋は、平安時代から室町時代ごろまで製作され、米を炊く釜として使用されてきました。滑石は、硬度1の軟質鉱物で、保温性に優れています。そのため、広く石鍋の材料として使用され、石鍋として使用されなくなると、小割おんじやくにして温石おんじやく(現在のカイロ)として転用されるなどしました。今回、出土した石鍋も温石に転用されています。滑石が軟らかく加工しやすい石といっても、岩盤から石材を切り出して、外内面を削って鍋にするのは手間がかかったことでしょう。

12世紀初めの記録として、『筑前国船越莊二箇年未進注文(東大寺文書4-46)』には、「・・石鍋一口直十疋 白布二丈五尺直六疋 刀一振直十五疋・牛一頭直四十疋・」の記載があり、当時は石鍋4個で牛1頭という、とても高額なものだったようです。

石鍋は関東地方から沖縄県までの広範囲で出土しています。生産地としては長崎県西彼杵半島が知られていますが、その他、山口県宇部市など、滑石の鉱床は日本列島各地に分布します。遠く九州や中国地方から運ばれたものか、別の土地から和歌山へ運ばれてきたものか、興味が尽きません。

(田之上裕子)



入郷遺跡出土の滑石製石鍋

## 催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2022年夏～2022年秋)

### 和歌山県立紀伊風土記の丘

- 秋期特別展「紀氏、大地を開く―宮井用水と耕地開発―」  
2022年10月1日(土)～2022年12月4日(日)

### 和歌山県立博物館

- 企画展「あの人からの手紙」  
2022年8月27日(土)～2022年10月2日(日)

### 高野山霊宝館

- 第43回高野山霊宝館大宝蔵展「高野山の名宝～数字と高野山～」  
2022年7月16日(土)～2022年10月10日(月・祝)
- 令和4年度秋期企画展「仏を護る入れ物～納める・容れる・包む」  
2022年10月15日(土)～2023年1月15日(日)

### 和歌山市立博物館

- 企画展「発掘された江戸時代の暮らし」  
2022年9月17日(土)～2022年10月16日(日)

### 和歌山県文化財センター

- ミニミニ展示「考古学ペーパークラフトコレクション(関西編)」  
2022年9月1日(木)～2022年11月30日(水)

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、期間変更や中止となる可能性があります。  
掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。



#### 目次

- 1 表紙 上：竣工正面  
左下：軸部及び壁板の組立  
右下：軒の組立
- 2 特集「藤崎弁天 弁天堂の保存修理」
- 6 埋蔵文化財課 短信「入郷遺跡の発掘調査」
- 7 きのくに歴史小話「文化財建造物課 名手役所の現場から 差鴨居」  
「埋蔵文化財課 どこから来たの？滑石製石鍋」
- 8 催し物案内

## 風車99 (2022・夏号)

令和4年8月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1  
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270  
kanri-2@wabunse.or.jp



LINE公式アカウント

ID : @942tjyhk

